

三輪清三, 東条静夫, 土屋尚義

(千葉大第一内科)

小川道一(千葉大第二内科)

慢性腎不全の治療として, 人工腎臓による血液造析と, 同種腎移植が行なわれている。現在, 世界において, 永久治癒を期待できる同種腎移植症例は1,000例を数えるに至った。われわれの教室においても, 近親者より供腎者を得て, 3例の腎移植を行なった。第1例は約200日, 第2例は180日, 第3例は60日と, いずれも経過は順調である。これらの臨床経過を報告する, とともに腎移植の適応, 供腎者の選択, Rejection に対する処置等について報告したいと思う。

34. 教室における脊髄腫瘍症例の検討

辻 陽雄, 篠原寛休, 重広信三郎, 上 原朗

(千葉大整形外科)

脊髄性麻痺性疾患の中に「脊髄腫瘍」の占める割合は必ずしも少なくない。

千葉大学整形外科教室において過去13年間に経験した脊髄腫瘍例は31例に及ぶが, これらのうち内科的領域において, いわゆる「脊髄炎」なる概念のもとに治療経過せられる症例が少なくない。

われわれは, これらの脊髄腫瘍症例31例についての詳細な検討を行なうとともに, 常に脊髄腫瘍の概念の把握のもとにのぞむことの必要を強調する。

また, 予後についても述べる。

一 般 口 演

(座 長 : 香月秀雄教授)

35. 子宮頸癌細胞診における悪性基準の再検討

御園生雄三, 武田敏, 貝田豊郷, 守矢和人
周 美錦, 増田 武, 鈴木通也, 田中 穰
高見沢裕吉, 戸沢 澄(千葉大産婦人科)

子宮頸癌の細胞診において Papanicolaou III 型に属する「悪性を疑いながら悪性と断定し得ない細胞群」をいかに, より正確に診断するかが現在問題とされている。従来細胞の悪性基準には, 核異型, 核細胞質比増加, 核質粗大顆粒, 核膜肥厚, 核小体肥大等が数えられてきたが, これらの重要性の比重について充分の検討がなされていない。千葉大学産婦人科教室で Papanicolaou III 型と診断された良性異型上皮, 腔炎, ポリープ, 再生上皮等のスミア標本と子宮頸癌のそれを比較し, 上記悪性基準の項目別に検討した。この結果に基づいて細胞の簡易判定器を製作しその診断成績について報告する。

36. 全身麻酔併用による気管支鏡検査について

松本博雄, 堀江昌平, 小林延年, 大塚俊道
(千葉大肺癌研究施設)

1963年1月より, 1967年3月末までに, 当肺癌研究所において, 全麻併用気管支鏡検査件数は, 初期の局麻例38例を除くと, 1,020例に達する。これを男女別にみ

ると, 男685例(67.2%), 女335例(32.8%)である。年齢別では, 最低2才, 最高84才であり, 50才以上のものが, 全体の半数以上をしめている。肺癌は, われわれが検索の中心としている疾患であるが, 全体の約20%に及んでいる。さらに肺癌について, 検査件数, 男女別, 年齢別, 気管支鏡所見等について検討した。全麻併用気管支鏡検査における偶発事故は, 7例で, 内訳は, 気道カイン3例, 大出血2例, その他となっている。全麻併用気管支鏡はきわめて安全, かつ, 確実に気管支内腔の状態を, 把握することができ, また内腔からの諸検査施行のためにも, はなはだ有利であり, われわれは, 一般外来にも routine の検査として施行している。

37. Fallot 四徴症根治手術について

岡村 宏, 相楽恒俊, 中村常太郎, 松岡淳夫
瀬崎登志彰

(千葉県立鶴舞病院心肺センター)

舞鶴病院心肺センターにおける本症症例数は現在までに23例であり, 治癒率は87%である。本年始めからは17例であるが死亡例は全くなく治癒率100%となった。23例中12例が5才以下で, 全例何らの合併症もなく治癒している。今回はこれらの症例中特に興味ある症例を紹介し, その問題点を論じ, さらに5才以下の症例の手